World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第73回

天津　知られていない親しみやすさ

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

天津という街の名前に、日本人は特別な親しみがある。天津甘栗や天津飯など、日本には天津の名が付く食べ物があるせいだろう。だが実際の天津にはこれらはないと、学生時代に天津出身の教師から言われたのを鮮明に覚えている。今回は我々が知っているようで、実はあまり知らない天津をご紹介してみたい。

歴史的建造物が多い街

天津市は現在では首都北京から高速鉄道で僅か30分の距離にあり、北京の衛星都市のように思われている部分もある。だが北京で仕事をしていた頃、『政治は北京、経済は上海、広州（今は深圳）、そして天津の３つが担っている』と言われていた。建国以来、北京や上海と並んで省より格上の直轄市だったことでも、天津の位置付けのほどが分かる。

歴史的にみても、貿易港として栄えた天津。清朝が崩壊した後、多くの商人は天津に移り、ラストエンペラー溥儀も紫禁城を出て、ここに住まいした。「張園」は、当時の日本租界にあり、今もその建物はひっそりと残っている。溥儀は満州国皇帝になるためにここから天津を脱出したのだと聞くと歴史の一ページを垣間見ている感じになる。ここで一緒に暮らした側室、文繍に訴えられ、中国史上初の離婚歴のある皇帝となった、という表現には、古い王朝体質からの変化が感じられ、ちょっと興味深い。なお、張園の周辺には、今も日本時代の多くの建築物が残されており、フラフラと歩いてみるのも一興である。

写真１　五大道に残る歴史的建築物

また、旧イギリス租界の一角にあった五大道は、成都、重慶、常徳、大理、睦南及び馬場の５つの街道からその名が付けられ、全部の道を歩いたら20㎞近くある。天津には1,000近くの歴史的建造物が保存対象となっているが、そのうち半数近くがこの地区にあるという。清朝瓦解後、天津に逃れてきた貴族や金持ちが住んでいたと言われており、洋風の建物が多い割には、実は中国人の街であった（日本人も僅かに住んでいた）。今でも著名人の末裔たちがひっそりと暮らしているらしい。

慶王府のような中国風の建物もみられるが、洋館が多い。保存はきちんと行われており、状態の良い建物が多くみられる。有名人の各家の前にはプレートが掛かっており、説明も付いている。私にはよく分からないが、中国人ならすぐわかる、買弁、商人、軍人、医者など、さまざまな職業の人々の家がそこにあった。10年前に来た時に入った茶楼もそのままの姿で残っていた。

メインは大きな競技場、コロッセオとでもいうのだろうか。1920年に建設が始まった総合運動場である（2014年に全面改修が終了）。建設には天津生ま

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

れのイギリス人、1924年のパリ五輪、400m走で世界新記録、金メダルのエリック・ヘンリー・リデルも関与していた。彼はその後も天津に住み、日本軍により強制収容所に入れられ、そこで死亡した。両親が宣教師で、義和団事件直後の天津で生まれたリデルの生涯は、この地の波乱の歴史と重なり、実に興味深い。

運動場を囲む建物のなかには博物館があり、100年以上前の天津の生活、薬局やレストラン、カフェ、写真館や日本人が開いた床屋までが再現されており、展示されていた。往時如何に天津には海外から人々が集まり（後の米国大統領など著名人も多く含まれる）、暮らしていたのか、その様子がよくわかる。博物館に併設されたカフェ、「キースリン」は1901年にドイツ人が開いた店で、スイーツが有名。溥儀も足を運んでいたという。

親しみやすい文化が育まれた街

天津名物といえば、1858年創業の老舗、『犬も食わない』狗不理包子がある。2000年頃ここに来て食べたが、従業員の態度は最悪で、肉まんも特にうまいとも感じず、散々だった思い出がある。今回行って見ると、店内はとてもきれいになっており、従業員の対応も悪くはなかった。肉まんも美味しく頂き、国営体質から移行した、その変化には驚かされる。勿論料金は数倍になっていたが。

天津甘栗も不思議な食べ物だ。元々河北省で沢山取れる栗を、ゴマ油と砂糖を加えていり上げる糖炒栗子。天津とは本来関係はないが、日本では天津から船で栗が運ばれて来たことから、その名が付いたとも言われている。因みに天津丼については、天津と付いた意味さえ分からないが、それほどに日本では天津という地名に親しみがあったということだろうか。

天津の食べ物はどれも美味しかったが、特に感激したのが、豆腐脳。醤油ベースのタレを暖かい豆腐にかけて食べる朝ご飯の定番。今でも庶民の住む団地の入り口などでは、僅か２元（33円）。店の人の対応も非常に丁寧で、この土地の温かみが感じられる。

旧市街の中心部に鼓楼があり、その隣りには広東会館があった。広東会館というのだから、その昔はこの港町で広東商人などが集う場所だったはずだ。ところが、建物に入って見てびっくり。そこには立派な劇場があり、ちょうど「相声」という漫才が行われ、大勢の観客が笑い転げて、熱気で溢れていた。周囲には京劇の人形なども展示されてあり、時間によっては京劇が上演されていることも分かる。僅か入場料10元で、このタイムスリップ感とコスパの良さは、すごい。往時は京劇界のスター、梅蘭芳などが舞台に立ったとも聞く。

実は天津は文化都市でもあった。中国人に『天津と成都は古代から豊かな街だよ』と言われたことがあるが、意味がよく分からなかった。ただ実際に行ってみると、地元民に何とも言えない余裕のある雰囲気がある。港町天津は商人の街、天津人は当然スキのない、利益に目ざとい人たちが多いと思い込んでいたが、天津の街で出会う人々は、皆開放的で、驚くほどに人が良かった。

写真２　天津の朝ご飯　豆腐脳